

第5学年 社会科の実践

1 単元名 未来を作り出す工業生産「1 自動車の生産にはげむ人々」(全12時間 本時9時間目)

2 単元目標

- 我が国の工業生産が、その生産にかかわる人々の工夫や努力によって支えられていることを理解するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切にまとめる技能を身に付けるようにする。
- 自動車生産に関わる人々の働きを多面的に考える力、生産に関わる課題を把握して、これからの自動車生産の発展について考える力、考えたことを説明する力を養う。
- 我が国の自動車生産について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。

3 「ひびき合う三の丸の子どもたち」にせまるために

- 研究課題「子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」
手だて…子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり
高学年ブロックテーマ「仲間への理解、自立する自分」
- ・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切に作る姿
 - ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

<聴く・話すについての指導>

友達の話を書くときは、自分の話をせず発言する友だちに注目して聞くことができている反面、友達と自分の意見が同じなのか、ちがうのか、似ているのかを比べながら聞くことは十分にできていない。そのため、発言するときに「〇〇さんの意見に似ている」「〇〇さんの意見と同じで」など、友達の意見につなげて発言することが苦手である。現段階では、「〇〇さんと似ている意見の人?」「〇〇さんと同じ意見の人?」と教師が話し合いのファシリテーションをしながら、「比べながら聞き、発言をする」という力を養っているところである。また、板書が「比べながら聞くための手だて」となるように意識している。具体的には、意見の分布をわかりやすくまとめたり、誰の考えかがわかるようにネームカードを活用したりしている。子どもたちが板書を見ながら、「自分の考えはどこに位置づけされるのか」「だれと同じなのか」「どの意見に近いのか」などを考え発言できるようにしたい。

さらに、「反応しながら聞く」ことを指導している。友達と自分の意見とを比べながら聞かなければ、反応することはできない。また、反応することから「え、ちょっと待って。それって…」「でもさ…」など、ひびき合いにつながる発言が生まれると考えている。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

これまでの関わり合いについて、子どもたちは、学級の係活動の中で創意工夫を生かし、自分たちの学級生活を楽しくしようとそれぞれが意欲的に活動している。普段の休み時間には、仲の良い友達としか関わらない子どもが多いが、係活動主体のパーティーを通してみんなで楽しい時間を共有することがで

き、「関わり合い」の柱の一つとなっている。また、朝の会で日直のスピーチを行った。これは、みんなの前で話をすることに慣れさせるとともに、スピーチのテーマを「今はまっていること」「好きな○○」「将来の夢について」などとし、互いのことを前向きに理解することを目的として行っている。

ひびき合いについては、今年度の総合学習のテーマを決める際には十分に時間を取り、じっくり話し合った。その話し合いの中で、友達と協力しながら進める活動になっているか、いろいろな教科の力を使って問題を乗り越えながらやり遂げる活動になっているか、またそのテーマを選択したときのメリットやデメリットは何かなど、さまざまな視点から率直に意見を出し合った。「自分は○○がいいと思っていたけど、その視点から考えるとこっちの方がいいかもしれない。」「いろいろな視点から考えて、やっぱりこのテーマがいいと思う。」など、時間はかかったがみんなが納得する形で学級のテーマを決めることができた。また、社会科の「これからの食料生産」の学習では、「日本はこんなにいろいろなことを取り組んでいるのに、なぜ食料自給率が上がらないんだろう」という問いが生まれた。それまでの調べ学習の中で、食料自給率を上げるために、生産者も消費者も国も様々な取り組みをしていることを知った。それにもかかわらず、日本の食料自給率はこの20年間で上がるどころか、2%も減少している。この事実直面し、子どもたちは「こんなに取り組んでいるのに、食料自給率が減っているのは何でだろう。」という問いをもった。「取り組み方が甘いのかも。」「まずは、自分たちが地元の野菜を選んだり、食べ残しを減らしたりするようにしないとイケない。」「でも、家の人や、国産の物は高いから買わないって言うてる。」「僕も苦手な食べ物が多いから、給食を残さず食べるのは無理。」など、理想と現実の中で葛藤が生まれた。このように、一つの事象について一方向だけから考えるのではなく、一度立ち止まって「なぜ?」「どうして?」と考える機会をつくり、そこからひびき合いが生まれる姿をめざしていきたい。

4 単元と指導について

<単元について>

本単元では、日本の基幹産業である自動車の生産について学習する。学習指導要領の内容には「工業生産に関わる人々は、消費者の需要や社会の変化に対応し、優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして、工業生産を支えていることを理解すること。」とある。今までに、米作りや水産業など食料生産に関する学習を進めてきたが、よりよいものを生産し消費者に届けるための工夫や努力、それを支える人々の思いなどは、自動車の生産にも共通する観点がある。

自動車の製造工程、工場相互の協力関係などを捉える学習については、写真や映像資料を組み合わせながら、子どもが意欲的に学習を進められるようにする。また、自動車の組み立て工場や部品を作る関連工場については、できるだけ子どもにとって身近な工場を取り上げる。特に、関連工場については、小田原市内にある工場を取り上げる。同じ小田原市内にも関連工場がたくさんあり、それらの中小工場が自動車の生産を支えているということをとらえられるようにする。

単元の後半では、自動車会社の人々は、車作りを通して環境問題や交通事故などの社会的な課題をどのように乗り越えようとしているのかを調べていく。その際、様々な立場の人（消費者）のニーズに応えながら車作りが進められていることを関連付けて考えられるようにする。現在の自動車産業は、自動運転技術や電気自動車の普及など変化が著しい。子どもたちは、現実に起きていることと学習内容とのつながりを感じることで、学習意欲が高まっていくと考える。そのため、教師が新しい情報の収集に努め、最新の動向を取り入れながら学習を進めていくようにする。

<指導について>

単元の導入では、1880年代→1930年代→1970年代→2010年代→現在（最新の自動車パンフレット）と順を追って、日本の国産自動車がどのように進化してきたのかを見る。そこで、教師から「現在の自動車は、いくつの部品でできていると思う？」と投げかける。この問いかけによって、学習問題をつくるときに、「自動車はどうやって作られるのか」だけではなく、「部品はどこで作られるのか」といった部品を作る関連工場についての問題も子どもたちから出されると考える。また、最新の自動車パンフレットを見ることにより、現在は環境や安全に配慮した車作りがされていることにも気づかせたい。

自動車作りの工程は、平塚市にある日産車体湘南工場の様子を取り上げる。そのため、教科書や資料集だけではなく、工場が作成しているパンフレットや動画なども活用して調べ学習を進める。11月5日には「オンライン工場見学」を行うので、それまでに調べたことを再度確認したり、まだわかっていないことを質問して解決する機会としたい。また、部品を作る関連工場については、小田原市内にある川田製作所を取り上げる。関連工場についての情報は少なく、子どもたちにとって身近な存在とはいえない。そこで、少しでも子どもの関心を高めるために、市内の工場を取り上げようと考えた。自動車工場と比べてとても小規模な工場で部品は作られているが、自動車工場と同様に、検査を繰り返して品質管理に努めていることを理解する。また、部品作りに携わる人々が「小さな部品ではあるが、私たちが日本のものづくりを支えている」という気概と誇りをもって仕事をしているということを実感させたい。

単元の後半では、自動車会社の人々は、車作りを通して環境問題や交通事故などの社会的な課題をどのように乗り越えようとしているのかを調べていく。環境に配慮するために、従来のガソリンカーよりも排気ガスを減らせるハイブリッドカーや電気自動車、燃料電池自動車が作られている。また、交通事故を減らすためにペダル踏み間違い防止機能や自動ブレーキを備えたサポートカーや、自動運転の機能が付いた自動車が開発され実際に販売されている。特に、自動運転技術については新しい技術であるので、調べ学習を行う際には、教師が最新の資料を用意し子どもたちに提示するようにする。また、日本の交通事故件数の推移や、年齢別の交通事故件数、交通事故の原因などの統計資料を提示し、交通事故に関する問題と自動車作りがどのように関係しているのかをとらえられるようにする。

自動車会社は、自動運転技術をテレビコマーシャル等でPRしており、子どもたちも「自動運転」という言葉を耳にしている。自動車のパンフレットの中でも、自動運転機能がPRされている。そのため、何となく「自動車会社は自動運転の車を消費者に知ってもらいたいんだ。」ということを感じられると思う。また、「将来は人間が運転するのではなく、完全に自動運転化されるかもしれない。」と、子どもたちの関心も高い。さらに、調べ学習の中で、実際に自動運転によるバスやタクシーが実用化されていることを知ると、「自動運転ってすごいな！」「もっと自動運転が進めばいいのに。」という思いを持つと考える。しかし、実際には、運転手が自動運転技術を過信したために事故が起きたり、機械の不具合により事故が起きたりするケースもみられる。東京パラリンピックの選手村では、自動運転をしていたバスが選手に接触し事故を起こしたという事例があった。このような自動運転に関する事故の例を提示し、一旦立ち止まって「このまま自動運転を進めていいのかな。」と、子どもたちの問いを生むきっかけとしたい。

ノート指導については、まず、自分の考えをしっかりと書かせる。これによって、自分の考えを明確にするだけではなく、授業の最後に自分の考えの変容を確かめることができる。また、必要に応じて統計資料や板書の写真をノートにはり、自分の考えをつくる際に根拠を持てるようにする。さらに、子どもが書い

た学習感想に対して、次の学習につながりそうなことやさらに深めてほしいことに赤ペンを入れたり、学習を深めるためのアドバイスなどを記入したりしていく。

本時に子どもが解決したい問題は「事故が起こる危険があるのに、どうして自動運転を進めようとして
いるんだろう？」である。自動車会社も社会全体も「交通事故を無くしたい」という願いは同じである。事故に関する統計資料を振り返り、事故の原因と関わらせながら根拠を持って考えられるようにする。また、自動運転技術は事故を減らすだけではなく、トラックの輸送費用の軽減、運転手の人手不足の解消、誰もが移動しやすい街づくりなどにつながるなど、話し合いを通して自動運転がもたらすよさを多面的・多角的にとらえられるようにする。「自動車会社はなぜ自動運転を進めようとしているのか、話し合いを通して多面的・多角的に考え、自分の考えを広げたり深めたりできる姿」をひびき合いの姿とする。そして、自動運転技術によって、様々な立場の人が安心して運転でき、暮らしやすい社会につながっていくことを感じさせたい。

5 単元構想 5年社会 「自動車の生産にはげむ人々」 全12時間 本時8時間目

単元目標

- 我が国の工業生産が、その生産にかかわる人々の工夫や努力によって支えられていることを理解するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切にまとめる技能を身に付けるようにする。
- 自動車生産に関わる人々の働きを多面的に考える力、生産に関わる課題を把握して、これからの自動車生産の発展について考える力、考えたことを説明する力を養う。
- 我が国の自動車生産について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。

自動車はいつの部品からできていると思う？

- ・200くらい ・2、3万かな
- ・3万って聞いたことがある
- ・今の車は1億以上かも
- 約3万の車からできているよ
- ・すごい！ ・多いなあ
- ・そんなにたくさんの部品を使って、どうやって車を作っているんだろう？

自動車作りについて調べたいことを考えよう①

- ・車はどうやってできるのかな？
- ・車はどこで作ってるの？作っている場所の様子を知りたい。
- ・自動車工場に働いている人について知りたい。
- ・作った車はどうやって運ぶの？
- ・部品はどこで作ってるの？
- ・部品はどうやって作るの？
- ・車にどんな機能があるの？車に関する問題をどのように解決しているんだろう？
- ・未来はどんな車が作られるのか予想したい。自動運転になる！？
- ・なぜ生産量が増えたのかな？

・1880年代→1930年代→1970年代→2010年代の自動車の写真を提示し、自動車の性能が高まってきたことに気付かせる。
資料◇日本の自動車の生産台数の変化
◇世界の自動車生産台数に占める国ごとの割合
◇自動車会社のパンフレット

資料をもとに現在の自動車生産について予想し、学習問題を考え表現している【知・技】

どうやって車ができるの？③

プレス→溶接→塗装→組み立て

- ・人がやっているところと機械がやっているところがある。
- ・機械のほうが多いんじゃない。
- ・人と機械でどのように仕事を分けているの？
- ・鉄からどどんクゥルマっぽくなっていく。
- ・ちょっと危なそう…。 ・何人働いているのかな？
- ・はってある紙は何？ ・資格はいるの？
- ・一日に何台くらい作れるのかな。
- ・まちがえないようにする工夫がすごい。
- ・部品を作ってるところがない！他の工場で作ってるの？
- ・作った車はどこへ運ばれるの？ どうやって運ばれるの？

・プレス、溶接、塗装、組み立ての工程の写真カードを配付し、どのような順序で作られるか予想する。
資料◇資料集、教科書
◇日産車体作成の動画

自動車はラインに沿ってプレス、溶接、塗装、組み立ての順で生産されていることを理解している【知・技】

作っている場所の様子を知りたい！②

日産車体湘南工場（平塚市）

- ・どこにあるのかな？地図帳で調べよう。
- ・広い！でかい。
- ・工場はどこからどこまでかな？
- ・どこでどんなことをしているんだろう？

資料◇自動車工場を上空から見た写真
◇三の丸小学校と自動車工場の位置が把握できる地図

写真と地図を照らし合わせて、工場全体の様子を読み取っている【知・技】

なぜ人がやっているところと機械がやっているところがあるの？④

- ・重いものを運んだり、危険なことは機械がやっている。
- ・細かい作業は人間がやっている。
- ・精密な検査は機械のほうが正しく測れるんじゃない。
- ・でも、最後の点検は人間がやったほうがいいんだと思う。
- 機械と人間、それぞれのよさを組み合わせて車は作られている。
- だから、昔よりも生産量が上がったんじゃない。

自動車生産は、人とロボットが作業を分担したり、こまめに検査したりすることによって品質を大事にしつつ効率的に進められていることを理解している【知・技】

部品はどこで作られているの？⑤

川田製作所（小田原市）の様子

- ・部品は別の小さな工場で作られているんだ。
- ・小田原に部品工場があるんだね。
- ・でも、ここでは10個ぐらいの部品しか作っていないから、部品工場は他にもたくさんありそう。
- ・3000社ぐらいの工場が協力してるの？
- ・部品が足りなくなったらどうなるの？

・川田製作所で伺った話や写真をもとに学習を進める。
・部品工場の人は「小さい部品だが、一つ一つが自動車作りを支えている」という誇りを持って仕事をしていることを子どもたちに伝える。

自動車生産を支える関連工場の役割や、関連工場と自動車工場との結びつきについて理解している【知・技】

作った車はどこへ、どうやって運ばれるの？⑩

- ・自動車工場から高速道路が近いから、車で運ぶと思う。
- ・車を運ぶ車を見たことがある。
- ・遠くや外国へは、サンマと同じようにフェリーで運ぶんじゃない？
- ・外国にも輸出しているのかな？
- ・どこの港に運ぶのかな？

資料◇キャリアカーの写真
◇専用船の写真、動画

輸送しやすい場所に工場が立地していること、様々な輸送手段やそれに携わる人たちの工夫や努力があることを資料から読み取っている【知・技】

車に関する問題をどのように解決しているんだろう？⑦⑧⑥⑦

- ・排気ガスで空気がよごれるから、排気ガスを減らすように努力していると思う。
- ・排気ガスは地球温暖化につながる。
- ・地球温暖化を防がないと、食糧生産にも影響が出る。
- ・お年寄りの交通事故が増えているんじゃないかな？
- ・「あおり運転」っていうのも聞いたことがある。
- ・きっと、危ない運転が事故につながるんだよ。

環境問題	危険な運転による交通事故
<ul style="list-style-type: none"> ・走らせる仕組みを、ガソリンからハイブリッド、電気自動車、燃料電池自動車に変化させている。 ・自動車工場や部品工場でも、水や資源をリサイクルしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・駐車を助ける機能がある ・アクセルとブレーキのふみまちがい防止 ・自動運転につながる機能（自動ブレーキ、スピードのコントロール、車線のコントロールなど）

事故が起こる危険があるのに、どうして自動車会社は自動運転の車を販売しているんだろう？⑧(本時)

- ・車の運転が苦手な人も安心して運転できるようにするため。
- ・障害をもった人も安心して運転できる。・うちのお父さんも便利って喜ってた。
- ・お年寄りや若者の事故も減らせる。・やっぱり事故を減らしたいんだよ。
- ・交通事故の原因のほとんどは人によるものだから交通事故を減らせる。
- ・自動運転は環境にいい。・トラックの輸送費用を安くできる。
- ・運転手さんの人手不足に役立つ。・おじいちゃんが毎日車で病院に通っているよ。
- ・もう、自動運転のバスが走っているらしい。・いなくなに住んでいる人が便利になる。
- ・儲けるため。 ・国際的な競争で生き残るため。
- 自動運転が進むと、どんな社会になっていくのかな**
- ・事故がない、だれでも安心して運転できる社会
- ・だれでも行きたいところに行ける社会 ・環境にいい社会
- ・不便な所に住んでいる人も移動しやすくなる社会
- ・高齢者や若者のため ・トラックの運転手さんのため
- ・不便な所に住んでいる人のため
- ・それって「みんなのため」になるんじゃない？
- ・事故が無くなると、運転しない人も安心して生活できるようになる。
- ・運転する人もしない人も、安心して便利に過ごせる社会をめざしていると思う。
- ・今は開発中だから事故が起こるかもしれないけど、人間も車に頼りすぎないでうまく自動運転を使ったらいいと思う。
- ・自動車会社の人は、どんな気持ちで自動運転の車を作ってるのかな？
- ・日産車体の人に聞いてみよう！

自動車会社が自動運転技術を進めようとしている理由を、多面的・多角的に考える。
【思・判・表】

多様な人々のニーズや社会の動向を反映した生産が進められていることをとらえている【知・技】

- ・その他にも、車いすの人がそのまま乗れる車がある。
- ・足を出して開くドアがある。赤ちゃんを抱っこしているお母さんは便利。
- ・だれもが乗りやすい車作りをしているんだね。
- ・ユニバーサルデザインっていうんだって。
- ・自動運転が進化すれば、お年寄りや運転が苦手な人の事故も減らせそう。
- ・行きたいところに自由に行けるね！
- ・子どもでも運転できるようになる。
- でも、自動運転による事故があったらいい。**
- ・車も機械だから、壊れたら事故が起こるかも！
- ・今は開発中だから、開発するためのお金もかかる。
- ・車に頼りすぎちゃう人もいるんじゃない。
- ・事故が起こる危険があるのに、どうして自動運転の車を販売しようとしているんだろう。

・実際に車を運転するのは大人なので、おうちのの人に話を聞くように促す。
・どのような車を買いたいか、乗りたいか保護者の方にアンケートをとる。その結果から、自動車会社の人は消費者のニーズに合わせた車作りをしていることが実感できるようにする。
資料◇教科書、資料集 ◇図書資料 ◇自動車会社のパンフレット
◇交通事故数、高齢者の事故数の推移
◇交通事故の原因 ◇自動運転による事故のニュース

日産車体の人に話を聞いてみよう⑨

- ・事故が起きるかもしれないのに、どうして自動運転の車を販売しているんですか。
- ・作った車はどこへ運ばれますか。
- ・工夫していることは何ですか。
- ・やりがいは何ですか。
- ・大変なことは何ですか。

自動車作りについてさらに知識を広げたり、まだわからないことを質問したりする。【知・技】

自動車づくりについて学習したことをまとめよう⑩⑪

今まで学習したことを総合して、社会に必要とされる製品や優れた製品を消費者に届けようとしていることなどを考え、適切に表現している。
【思・判・表】
これまでの学習を生かし、今後の自動車生産の可能性について自分の考えをまとめようとしている。
【主体的に学習に取り組む態度】

6 本時について

- (1) 本時目標 事故が起こる危険があるのに、自動車会社はどうして自動運転技術を進めようとしているのか、話し合いを通して多面的・多角的に考え、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
- (2) 本時展開

学 習 活 動	主な支援・留意点 ◆評価【観点】
<p>事故が起こる危険があるのに、どうして自動車会社は自動運転の車を販売しているのだろうか？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>事故を減らすため</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間が起こす事故を減らせる。 ・人が運転するよりも安全性が高まる。 ・人間のサポートをしてくれる。 ・センサーやカメラが周りをよく見て安全 </div> <div style="width: 30%;"> <p>高齢者のため その他にも</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運転できない人 ・運転が苦手な人 ・疲れた人 ・障害がある人 ・病気がある人 <p style="text-align: center;">↑</p> <p>お手伝いをする負担を減らす 安心して乗れる</p> </div> <div style="width: 30%; border: 1px dashed gray; padding: 5px;"> <p style="text-align: right;">レベル5</p> <p style="text-align: center;">→</p> <p style="text-align: left;">レベル2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運転手さんの人手不足や高齢化に役立つ ・環境によい ・渋滞が減る </div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 20px;">これらを進めて、車の世界をよりよくしたい!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通事故がなくなる ・だれにとっても安心して、安全に乗れる ・だれでも行きたい所に行かれる ・環境にもいい ・渋滞が減る 	<p>◆評価【観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時まで一人ひとりの考えをノートに書かせ、意図的に指名ができるように個々の意見を把握しておく。 ・発言するときは、根拠を持って発言できるようにする。(統計資料、読み物資料、既習事項、家で聞いたこと) ・だれが発言したの分かるようにネームカードをはる。 ・「事故を減らすため」「だれでも安心して運転できるようにするため」「その他」など、発言の内容を分けて板書する。 ・自分の考えを発言できない子どもに対しては意図的に指名したり、同じ意見のところへネームカードをはったりするように促す。 ・授業の終末には、自動運転が進むとどのような社会になっていくのかを考えまとめる。 ・再度、本時の学習問題を振り返り、終末の段階でどのように考えているのか学習感想を書く。 <p>◆自動車会社が自動運転技術を進めようとしている理由を、多面的・多角的に考える。 【思・判・表】</p>

7 実践を終えて

単元の導入では、ある子が「車を作っている人は、車に関係する問題をどうやって解決しているんだろう。」とつぶやいた。「自動車に関係する問題って何？」と問い返すと、環境問題や事故が起こることが挙げられた。そして、この問題を柱として、本単元の学習を進めていくことになった。また、子どもたちは、既習事項（日本の食料自給率はトラック輸送が支えている、どの産業も人手不足、働く人の高齢化など）と自動車の生産に関わる問題をつなげたり関わらせたりしながら考え、学習を進めていく姿が見られた。

本時の学習問題「事故が起こる危険があるのに、どうして自動車会社は自動運転の車を販売しているのだろうか？」は、子どもが解決したい問題になっていたのではないかと考える。子どもたちは、調べ学習を進める中で「自動運転技術は、高速道路や駐車時の運転をサポートしてくれたり、危険を察知したりしてくれるので便利」「もっと技術が進んでほしい」という前向きな思いを持った。しかし、「自動運転による事故が起きている」「東京オリンピックの選手村でも事故が起こった」という事実に出合い、子どもたちの思いは揺さぶられる。「自動運転は便利だけど、今の段階では、自分だったら乗りたくないな。」と考える子どもが多くいる中で、「じゃあ、なんで販売しているの？」というある子の子つぶやきが本時の学習問題につながった。その問題を解決するため、もう一度資料を調べ直したり、教師が提示した統計資料を見直したりして、自分の考えをつくろうとする姿が見られた。また、「うちのおじいちゃんは、毎日病院に行かないと死んじゃうんだよ。でも、自動運転が進んだら、おじいちゃんでも安心して病院に行かれるようになる。」と、身近にいる家族の姿と学習問題をつなげ、自分なりの根拠をもって考えを伝えようとする子どももいた。

本実践を通しての成果は、子どもの思考に寄り添いながら単元構想をつくることにより、子どもの切実感をより深くするための資料を準備することができ、子どもの中に「なぜ？」「どうして？」が生まれるタイミングで資料を提示することができた。また、この単元の学習を通して、自動車の生産に携わる人々は、ただ単にものを作っているのではなく、「交通事故を減らしたい」「誰もが行きたい時に行きたい場所に行かれる社会をつくりたい」など、人々を幸せにしたいという大きな願いを持ってものづくりに励んでいるということを理解することができたと思う。

しかし、本時では「自動運転の技術が進むと、こんなにいいことがある」という一面でしか、学習問題にせまることができなかった。本時の話し合いの中で、子どもたちは「人による事故を減らすため」「運転したくてもできない人のサポートをするため」「トラック運転手の人手不足を解消するため」「二酸化炭素を減らすため」など、自動運転のメリットにつながる意見を多く発言した。反対に、少数ではあるが、自動運転に対して、不安や心配な思いを発言した子どももいた。しかし、教師自身にその意見を生かそうとする構えがなく、子どもの考えのずれを焦点化することができなかった。そのため、本時の話し合いは、互いの考えを理解し合うところにとどまってしまった。ずれを焦点化し、一旦立ち止まって考えさせることができているならば、子どもの考えに変容が見られ、もっとひびき合うことができたのではないかと思う。また、電気自動車の生産・開発で遅れをとっている日本は、自動運転技術を高めていかないと世界の市場で生き残れないという側面も持ち合わせている。このように、一つの事柄を多角的に考え、その光と影をしっかりと見つめることで、子どもたちに社会認識力を育て、ひびき合うことができる授業をめざしていきたい。